Part.3

「入試」はどう変わった?

社会の変化に応じて大学入試も多種多様に選択できる時代

社会での働き方、高校の学びが大きく変化するとともに、大学での学びや、大学に入るための入試も保護者の時代とは大きく変わっています。2025年度から新課程での入試が始まりましたが、どう変わり、なぜ変わったのか、大学など高等教育機関の情報誌の編集長を務める小林 浩さんに教えてもらいました。

リクルート進学総研所長　『カレッジマネジメント』編集長
小林 浩さん

1964年生まれ。株式会社リクルート入社後、グループ統括業務を担当。「ケイコとマナブ」企画業務等を担当。経済同友会に出向し、教育政策提言の策定に関わる。その後、経営企画室、会長秘書、特別顧問政策秘書などを経て2007年より現職。文部科学省中央教育審議会高大接続特別部会委員等、さまざまな委員を歴任。現在は、文部科学省中央教育審議会大学分科会高等教育の在り方に関する特別部会委員(2023年～)、中央教育審議会大学分科会質向上・質保証システム部会委員(2025年～)、文部科学省地域大学振興に関する有識者会議(2025年～)を務める。

保護者の時代とどう違う?

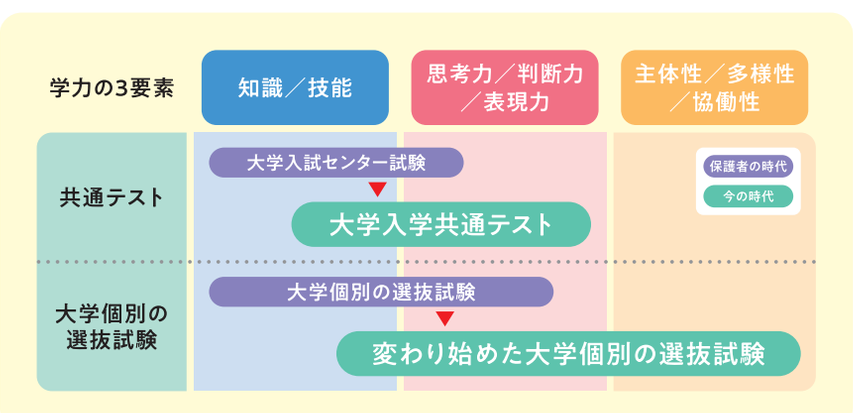
国語以外でも長文読解力や論理的な思考力が必要

大学受験の中核を担う、毎年1月に行われていた「大学入試センター試験」(以下、センター試験)。これが2021年度から「大学入学共通テスト」(以下、共通テスト)に変わりました。名称が変更されただけでなく、知識があれば解答できる問題が減り、国語以外の教科でも多数の資料や長文を読み込んで、論理的な思考力がないと解答できない問題が増えるなど、問題の質も大きく変わっています。こうした変化は共通テストに限らず、大学個別の選抜試験にも見られる傾向です。また、英語の4技能(読む、聞く、書く、話す)を測るために、実用英語技能検定やTOEFL iBT®テストなどの民間試験結果を活用する大学も珍しくなくなってきています。

入試が変わった理由には「学力観の変化」があります。保護者の皆さんが高校生だった時代は、学力=知識・技能でした。試験問題のみで測れる力で、いわゆる偏差値という軸で大学も序列化されていました。しかし、社会や働き方が大きく変化している予測不能な現代では、既存の知識・技能だけではもう対応することができません。そこで、文部科学省では学力を多角的な視点で捉え「学力の3要素」に整理したのです。

学力の3要素とは「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」のこと。今までの知識・技能が大切なことはもちろん、自ら課題を発見し、解決に向けて探究し、その成果を発表できる力や、主体性をもって多様な人々と多様な場面で協働する力を教育で身につけようということです。

図1　保護者の時代と今の、入学者選抜における「学力の3要素」の評価ポイントの変化



取材・文／長島佳子

知識・技能だけでなく学力の3要素を測る入試に

高校では2022年度から学習指導要領が変わり、新課程では「総合的な探究の時間」が必修科目となったことが、学力の3要素を総合的に育てる取組の一例です。ほかにも「地理探究」や「理数探究」など、探究の名を冠した科目が設置され、既存の教科・科目でも探究的な学びが盛り込まれています。現在の学習指導要領で育成すべき資質・能力の3つの柱、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」（**13ページ図2**）の基となっているのが学力の3要素なのです。

共通テストなど大学入試の変化は〝入試改革〟とよく言われますが、世の中の変化に合わせて、高校の授業も大学も変化を余儀なくされ、高校から大学への入口である入試も変える必要性から、高大接続改革という大きな教育改革の一環で入試も改革されているということです。入学志望者の学力の3要素を大学が測るために入試が変わってきているので、保護者の時代のように机に向かって勉強するだけの学力では対応できなくなっているのです。

学力の3要素と入試の対応を表したのが図1です。当初は共通テストに記述式の解答を導入することが検討されていましたが、現状はセンター試験同様に全問マークシート方式です。しかし、前述のように論理的な思考力が求められる問題が多数出題されています。一方で、大学個別の選抜試験では記述式問題や小論文が増加傾向にあり、「思考力・判断力・表現力」を測るプレゼンテーションや、「主体性・多様性・協働性」を測るグループディスカッションが入試に取り入れられ始めています。

入試方法の多様化で挑戦の機会が増えている

新課程の対応に先駆けて、先進的な入学者選抜を早くから始めていた大学も少なくありません。全体的な流れとしては、保護者の時代は一般入試やセンター試験が主流だったことに対し、総合型選抜に力を入れている大学が増えているのが特徴です。

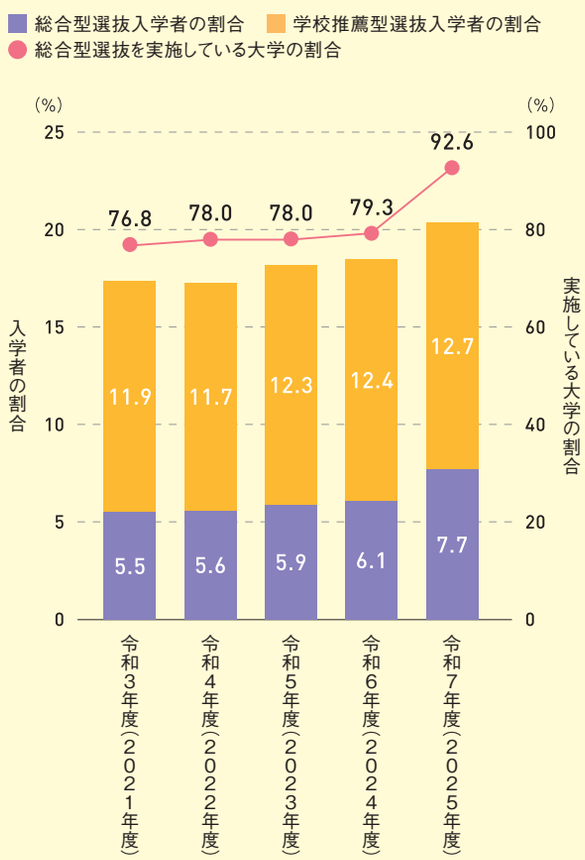
総合型選抜とは以前のAO入試が改定された入試区分。大学個別の入試方法も図2のように見直され、保護者の時代とは名称も選抜方法も変わっているのです。いずれの入試でも学力の3要素をしっかり評価しようとしています。

特に、総合型選抜を実施する大学は増加傾向にあります。文部科学省の調査（※1）では総合型選抜は2025年

図2 大学入学者選抜の入試区分の変化

保護者の時代	今の時代
一般入試 ●出題科目が1～2科目に限定 ●記述式問題の出題なし、評価軸が知識量や暗記力に偏りあり ●英語：「話す」「書く」の評価がない	**一般選抜** ●学力検査、小論文など入学志願者本人の記載する資料等により、入学志願者の能力・意欲・適性等を多面的・総合的に評価・判定する入試方法
AO入試 ●知識・技能の修得状況に過度に重点をおいた選抜としない	**総合型選抜** ●各大学が実施する評価方法等又は「大学入学共通テスト」のうち、いずれか一つの活用が必須 ●本人の記載する資料（活動報告書、大学入学希望理由書、学修計画書等）を積極的に活用
推薦入試 ●原則として学力検査を免除	**学校推薦型選抜** ●各大学が実施する評価方法等又は「大学入学共通テスト」のうち、いずれか一つの活用が必須 ●推薦書で「学力の3要素」を評価する記載と、大学が選抜にあたりこれらを活用することが必須

図3 国立大学の総合型選抜+学校推薦型選抜の入学者と総合型選抜実施大学の割合



※1 文部科学省「国公私立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要」（令和5年度版、令和7年度版）から編集部にて集計

度に私立で95・8％、国立で92・6％と大半の大学が実施。国立の実施大学は前年から13・3％も急増。入学者の割合では、学校推薦型選抜と合わせると私立では61・6％と6割を超え、一般選抜が主流と思われがちな国立でも20・4％と2割が一般選抜以外で入学し、さらに増加傾向にあるのです（図3）。

注目されているのは京都大学などの超難関国立大学での総合型選抜導入です。研究重視型の大学で総合型選抜を重視する傾向が強く、東北大学では総合型選抜からの入学者の大学院進学率が高いことが検証されていることもあり、2050年までに総合型選抜の比率を100％にすると明言しています。

これらの背景にあるのは、大学ごとに求める人物像が非常に多様化していることです。昔のように大学と生徒が偏差値だけで対応しているのではなく、総合型選抜では高校時代の探究での活動内容を評価するなど、生徒のさまざまな強みを評価できます。また、日頃からコツコツと学べる子どもは学校推薦型選抜が向いているなど、子どものタイプによって大学との接続機会が多様になっています。保護者には複雑に感じるかもしれませんが、偏差値だけで考えると選択肢に入らなかった大学・学部でも、子どもの個性や学びたいことと実はマッチしているなど、大学との出会いの機会が増えていると捉えられると思います。

新課程でどう変わった？
「情報」を利用する大学が増加 私立の共通テスト利用は減少

新課程に対応した入学者選抜が2025年度からスタートしました。共通テストでは、「情報」が加わり、科目の再編もあり、従来の「6科目」から「7教科・21科目」になっています。

共通テストについては、2026年度から出願方法が変わっています。これまでは現役生は高校経由、既卒生は個人で行っていましたが、2026年度以降はすべての受験生が個人でWeb出願することになりました。今年は既卒生の共通テスト受験が増えたという報道もありましたが、Web出願になり卒業証明書が不要になったことなども一因にあったのかもしれません。出願は生徒自身がすることですが、保護者としてはこうした変更の情報は押さえておきたいですね。

新課程での共通テスト初年度だった2025年は、変化を様子見する大学もあったように感じますが、出題傾向が見えてきた2026年度は、共通テストを利用する私立大学でも、「情報」を選択科目のなかに入れる大学も増えています。

ただ、センター試験の時代から共通テストへの移行初期は私立大学のセンター試験・共通テスト利用が増加傾向にありましたが、一昨年から利用大学数は減少傾向になっています。理由はさまざま考えられますが、一つには前述のように、総合型選抜や学校推薦型選抜などのいわゆる「年内入試」が増加傾向にあることが考えられます。

年内入試だからといって、学力がまったく測られないというわけではありません。図2で示したように総合型選抜や学校推薦型選抜でも共通テストの利用や、大学独自の学力テストは必須としていますが、評価の中心は高校時代の活動評価でした。しかし、学力を主として評価する入試として年内に独自の学力テストを実施する大学も出てきています。これが意味するのは、3年生の早い時期に学力を測られるため1・2年生のうちから基礎学力の定着が重要となってくることです。保護者の時代のように「受験勉強は部活を引退してからスタート」という考えでは、こうした種類の入試方法には対応できません。多様な入試方法で挑戦の機会が増えているとはいえ、それらから選び取るためにも、高校入学時からの基礎学力も大切なのです。

なぜ入試は変わった？
社会で求められる力を大学で測り、育てるため

なぜ入試や高校、大学の学びが変わったのでしょう。生成型AIの出現など、

保護者の皆さんも日常で社会の変化のスピードを体感していると思いますが、今の教育改革は2030年の社会で求められる力をどう育むかの検討から始まっています。

2030年がどんな時代かは予測不能です。テストで測れる力はすべてAIに代替されるとも言われています。では、学生が社会に出るときに企業の採用担当者が何を重視しているかというと〝地頭(じあたま)の良さ〟なのです。

大企業でもいつ淘汰されるかわからないのが今の時代。答えが一つではない難問に直面したときに、自分の頭でどう考えられるかが試されることになります。自ら課題を見つけて論理的に判断したり、それを人とコミュニケーションして解決策を見出したりしていけるかという地頭の良さは、偏差値など旧来のものさしでは測れないものです。社会のニーズに対応できなければ、難関大学卒業者でも即戦力で活躍できないという危機感を大学がもち始め、より実社会に即したカリキュラムや協働的な学び方に変わってきています。

先の見えない時代で企業も大学も危機感をもって取り組んでいます。高大接続改革とは、社会に出たその先までを見据えた改革なのです。入試も学校も変わっていくなかで、保護者の皆さんもわが子の学びに対する考え方をアップデートしていく必要があるのではないでしょうか。

＼特色ある入学者選抜方式の例／

桜美林大学

社会が求める力をもった高校生を探究活動から評価する「探究入試 Spiral」

高大接続事業として早くから「ディスカバ！」という高校の探究支援をしてきた桜美林大学。2022年度から総合型選抜の一つとして「探究入試 Spiral」を実施。主体性や対話力などの非認知スキルを評価する社会（企業）の視点を入試の座標軸に取り込み、探究活動から何を学んだかを振り返り言語化できる能力を重視している。高校での探究活動を評価する「探究学習評価型」、「ディスカバ！」修了者対象の「ディスカバ！育成型」、外部アワードでの受賞歴を評価する「コンテスト活用型」の3区分を設け、過去4年間で志願者数が急増している。

熊本大学

文理融合の共創学環を開設し探究活動や課題解決力を図るKumamoto探究入試を導入

2026年度に「共創学環」を開設した熊本大学。文理の枠を越え、経営・マネジメント、国際的コミュニケーション、データサイエンスを体系的に学ぶ学際的教育により地域・グローバル社会で活躍できる人材育成を目的としている。それにともない総合型選抜の「Kumamoto探究入試」を導入。高校などでの探究活動を評価する「プレゼンテーション型」、事前に受講する課題解決セミナーにおいてレポートを提出することで出願資格を取得でき、レポート内容を踏まえた面接によって評価される「地域課題解決挑戦型」「グローバルリーダー育成型」の3方式がある。

北海道科学大学

生徒の志望分野で活躍する社会人が評価者に加わるキャリア教育的総合型選抜

北海道科学大学では2025年度より、3回のプログラムを通して、課題に応じた講義、トークセッションなどを課し、プレゼンテーションで評価する育成型の総合型選抜[Catalyze-カタライズ-]を実施。2016年度から導入していた前身となる「新ガリレオ入試」を発展させ、受験者が大学卒業後の自分の姿やキャリアについてより具体的にイメージできるよう、プレゼンテーション評価者に受験学科の卒業生をはじめとした有識者の社会人を加えた。プログラムを通して成長でき、入学後の学びの意欲が湧く入試であると、受験生にも好評だ。

保護者へのメッセージ

子どもが内発的動機で学びたい学びを

第1にお伝えしたいのは、大学入学はゴールではありません。これからの時代に必要な力をつけるための質の高いカリキュラムを実施している学校はたくさんあります。子どもたちの将来を見据えて、学びたいことが学べる大学選びをサポートしましょう。

そして、皆さんたちの時代の常識でお子さまにアドバイスしないように。各大学で選抜の機会が多様で複雑になっており、一つの大学で多様な入口を設けているのです。保護者の思い込みで薦めるのではなく、子ども自身が自分に合った大学と入試方法を、自分で調べるよう促してあげてください。

最後に、机に向かっている時間だけが勉強ではないということ。自分で課題を見つけられるようになるために、どこかで特別な体験をしに行く必要はありません。蚊に刺されやすい妹を可哀想に思い蚊の研究を行い、海外の大学に留学した少年もいます。身近なことに課題を見つけて、それについて家族で対話をすることで、学びの好奇心が育っていくこともあります。「勉強しろ」と保護者が子どもに言う時代は終わりました。「勉めて強いる」学びではなく、内発的に自分から学びたいことを見つけられるような学びにつながる可能性を含む会話が、家庭内でできるといいですね。